

# 修身説約 卷ノ一

復刊版



群馬地域文化振興会

序



自開明之說行小學子亦盡習德  
角亦列乾稱歐米之盛者持支  
那一偏之見者視以為固陋然而  
開明之說亦不能無弊焉試舉  
其一二則衣服居室喜其便且  
窄而不問資力不揆土俗歛棄擬  
其制衣可謂取舍失宜是與他性所

講習在於皮相而不知渾化融會  
適於實用焉耳者教訓之責者  
豈可不猛省哉余以縣官在上先  
國四年於茲矣上毛之地富於物  
產新輸出極多是以土人与外商屢  
相交通開明之說風俗之所易入而  
其弊之病子弟亦有難免者不  
蚤為之計則生徒之習反將害教

標之俗抑歐朱之盛其始出於勤勉  
所謂生憂患而死安樂者其所以由  
來蓋有漸矣今如上乞人民亦勤勉  
憂患各盡其職業自強不息則歐  
朱之盛不足羨焉官下之學近改教  
則以此篇充學科者意在欲抑開明  
之弊而啓自勉之端而已矣官下五百  
三小學四萬之生徒知余意之所存則

此書豈謂小補耶學務課負本戶氏  
好文筆故排課務從事於編纂案閱  
數月能竣其功頃將上本徵序於余乃  
舉此書之者為而作者以代序言云  
明治戊寅天長節前一日

君羊馬縣令楫取素彥選并書



修身說約卷の一

木戸麟編纂不口

第一

夫父母を、吾が身の本として、天地  
の間、大恩あること、父母小如くも  
ろなし、故に孝を、萬の行ひ乃本と  
し、

父母の恩ハ、鴻大をきとん、先其の  
一斑をいもん、人乃未生れさる  
也、懐胎ニ在りて、母を苦くめ、既生  
るれば、父母共小力を盡し、艱難辛  
苦を厭まば、して養育し、若病ふど  
有るときは、晝夜寒暑の別ちなく、  
吾が身を忘きて介抱し、只其の健

小成長むるを望むの佗何乃願ひ  
う有らん、其の少く長むる小及び  
てむ、善き人小成まうくと、學校へ  
通ませ、諸藝を學むせ、其の家を治  
むる程小なれば、縁哉求めて妻を  
迎へ、子孫の榮を希ふ、又世の人に  
交る哉見てむ、或ハ惡き友小引う



れ、或ハ不慮  
の難小遇を  
んかと、未目  
小見ぬ先迄  
え絶えぬ心  
配し、まべて  
一生乃いと

